ささらぎ

2016年1月23日
第1号
シニアネット横須賀
今城　基
横須賀市馬堀海岸 3-21-8
電話 046-843-2491
m-imajo@amber.plala.or.jp

『坊っちゃん』（ぼっちゃん）は、夏目漱石による日本の中編小説。一九〇六年（明治三九年）、『ホトトギス』第九巻第七号（四月一日発行）の「附録」（別冊ではない）として発表。一九〇七年（明治四〇年）一月一日発行の『鶉籠（ウズラカゴ）』（春陽堂刊）に収録された。その後は単独で単行本化されているものも多い。

主人公は東京の物理学校（東京理科大学の前身）を卒業したばかりの江戸っ子気質で血気盛んで無鉄砲な新任教師である。漱石が高等師範学校（後の東京高等師範学校）英語嘱託となって赴任を命ぜられ、愛媛県尋常中学校（松山東高校の前身）で一八九五年（明治二八年）四月から教鞭をとり、一八九六年（明治二九年）四月に熊本の第五高等学校へ赴任するまでの体験を下敷きに、後年書いた小説である。人物描写が滑稽で、わんぱく坊主のいたずらあり、悪口雑言あり、暴力沙汰あり、痴情のもつれあり、義理人情ありと、他の漱石作品と比べて大衆的であり、漱石の小説の中で最も多くの人に愛読されている作品である

親譲りの無鉄砲で子供の頃から損ばかりしている坊っちゃんは、父親と死別後、親の残した遺産のうち兄から渡された六〇〇円（兄は同時に清という名の下女に与えるようにと五〇円を渡した）を学費に東京の物理学校に入学。卒業後八日目、母校の校長の誘いに「行きましょうと即席に返事をした」ことから四国の旧制中学校に数学の教師（月給四〇円）として赴任した。（校長から辞令を渡されるが、辞令は帰京するとき海中投棄したことがここで語られ、坊っちゃんが少なくとも一回、帰京したことが読者に示唆される。）授業は一週二一時間（第七章）。赴任先で天麩羅蕎麦を四杯食べたこと、団子を二皿食べたこと、温泉の浴槽で遊泳したことを生徒から冷やかされ、初めての宿直の夜に寄宿生達から蚊帳の中にイナゴを入れられるなど、手ひどい嫌がらせを受けた坊っちゃんは、寄宿生らの処分を訴えるが、教頭の赤シャツや教員の大勢は事なかれ主義からうやむやにしようとする。坊っちゃんは、このときに唯一筋を通すことを主張した山嵐には心を許すようになった。

やがて坊っちゃんは、赤シャツがうらなりの婚約者マドンナへの横恋慕からうらなりを左遷したことを知り義憤にかられる。このことで坊っちゃんと山嵐は意気投合する。しかし、赤シャツの陰謀によって山嵐が辞職に追い込まれることになってしまう。坊っちゃんと山嵐は、赤シャツの不祥事を暴くための監視を始め、ついに芸者遊び帰りの赤シャツと その腰巾着の野だいこを取り押さえる。芸者遊びについて詰問するが、しらを切られたため、業を煮やし鉄拳により天誅を加えた。

即刻辞職した坊っちゃんは、東京に帰郷。街鉄の技手（月給二五円）となった。坊っちゃんの教師生活は、一か月間ほどにすぎなかった。（ウィキペディアより）

このページの作成概要

体裁　A4 縦　段落 5 段　縦書き　1 行 12 文字　MS 明朝 10.5P
上下に罫線　右上に題字　題字下に必要項目

記事　ウィキペディアから流し込み後、リンクをほとんど外し英数字は漢数字に変更。表題・写真は文字列の折り返しで内部を選択
（イメージの裏側にテキストが回りこまない）

写真　紙面の出来上がりをみてサイズを調整